



建学の精神

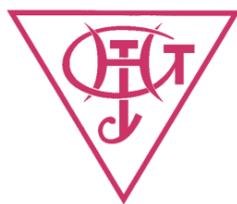
創立時の生徒は初代校長 エラ・チャーチの人格を通して建学の精神を学んでいます。

エラ・チャーチは、日本の文化と伝統を生かし、キリスト教による人格教育を基に人間としての真の生き方教育を実践しました。

キリスト教の神学的な徳の一つである「希望(のぞみ)」を生き方教育の柱とし、詩編 23 篇「主はわが羊飼いわれ乏しきことあらじ」という聖句を生徒に暗唱させています。これは欠乏、不安、行き詰まりの中にあっても、慰めと力があたえられ、「のぞみ」を持って生きることができるという教えです。

この精神を具現化するためにイーデス・ウイルククス校長は lady-like を標榜し、生徒に知徳備えて自律する、きりっとした人間像を求めました。

波岡三郎 第6代・8代校長は34年間に在職してこの遺訓を受け継ぎ、何度も繰り返して「あなた方はキリストの手紙(lady-likeを身につけて社会に送り出す手紙)」と語り、卒業生の心にこの精神を刻みしました。



日ノ本学園 校章・マーク
1926年(大正15)制定され、31回生の水野露子のデザインに教員が手を加えたもの。外側の正三角形は「霊(心)」「知」「体(からだ)」を、中の文字はイエス・キリストを中心に頭文字からつけられましたが、「God」「Jesus Christ」「Holy Spirit」という三位一体をも表わしています。

学校法人 日ノ本学園

〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂890-1

TEL : 079-232-4140 FAX : 079-232-8309



創立

関西におけるバプテスト派の活動は、1882年(明治15)ヘンリー・リース宣教師夫妻によって神戸浸礼教会(神戸浸礼教会とも呼ばれる。現・日本キリスト教団神戸聖愛教会)が設立されたのが始まりです。翌年には姫路浸礼派聖書講義所(現・日本キリスト教団姫路教会)が開設されましたが、城下町という保守的な土地柄に加え、当時の国粹主義的風潮から、伝道は困難を極めました。そこでリースは伝道の苗床づくりのために女学校が有効であることに気づき、婦人バプテスト外国伝道協会に教師派遣を依頼。それに応えたのが、日ノ本学園の初代校長 エラ・チャーチでした。

チャーチの最初の赴任地は東京の駿台英和女学校で、のちに横浜でも働きました。1892年(明治25)姫路に着任し、旧・士族町である五軒邸の仮住まいで私塾として始め、翌1893年(明治26)2月11日、下寺町に校舎兼寄宿舎と宣教師館を建て、日の本女学校が開校しました。当時の表記は、〈日の本)や〈日ノ本)が混在していて、厳密に決められていたわけではないようです。〈日の本)という校名は、チャーチを助けて働いた英語教員 高木鐸子の父君がつけたものです。ここからも、日の本女学校が宣教のためだけでなく、生徒の心と生活に関心を払いながら自由教育を行なうという方針が見て取れます。

チャーチは病気で帰国するまでの10年間、日の本女学校の創設期を担いました。副校長を務めた品川悠三郎は、姫路出身で神戸師範学校で学び、帰郷して公立小学校の教師となります。しかし、学童にキリスト教を語ったということで公立小学校を辞職。チャーチに招かれて日の本女学校の教員になりました。幼児期に親しんだ儒学の影響で日本的倫理観が強い品川は、漢文、修身、習字を教え、日の本女学校にとって一種のバランスともなりました。

文部省の「訓令第12号」による宗教教育の禁止に対しては、1918年(大正7)に、官立学校と同等の資格が認められる〈指定校)になるまで、女学校の地位に甘んじてキリスト教教育を貫きました。



初代校長 Ella R. Church (1892~1901年)
何事も、率先実行する
開拓者精神に富んだ女性宣教師でした。



創立の背景と歴史

姫路では、1874年(明治7)組合派の宣教師 ジョン・C・ベリーが本町の慈善病院(会社病院とも呼ばれ、現在の日赤姫路病院の前身)に招かれ、月のうち10日間診療を行ないながら、キリスト教の伝道をしていました。慈善病院の近くには、藩校 好古堂の教授であった田島藍水が廃藩後に開いた私塾がありました。田島は、英学の研究の一環として中国で出版された『天道遡源』という漢文の布教書の素読を勧める開学の人でした。田島自身も、子女や塾生もベリーの教えを受けるようになり、入信した田島はのちに大阪の梅花学園で教鞭をとっています。ここからは、伝道者となった辻蜜太郎、吉川亀、井上文慈郎や東京女子師範学校の第1回卒業生で保育事業の草分けとなった野口幽香が育っていきました。

しかし、横浜や神戸のような開港都市とは違い、城下町である姫路は保守的で、偏見も根強く、キリスト教教育にとっては苦勞も大きかったといえます。アメリカ・コネチカット州ウエスト・ウィリングトンで生まれたチャーチは、勤勉で、独立自主の気風に富んだ女性で、宣教師を志してからは、医術や看護学、大工仕事まで習いました。道具を携えて赴任し、西洋式の家事なども身をもって教える率先実行の人でした。

1892年(明治25) 姫路浸礼派聖書講義所の跡地を譲り受け、最初の校地としています。講義所は姫路出身で神戸浸礼教会に転出した信徒の吉川太平太の旧宅で始まりましたが、他所へ移転したため、リースの要請に応じて日の本女学校に移譲されました。ちなみに旧宅を姫路浸礼派聖書講義所の集会所として提供した吉川の子息が亀です。

来日した宣教師たちは、伝道のために不可欠な日本語の習得と聖書の翻訳に取り組みました。バプテスト(浸礼)派においては、1860年(安政7)4月に来日したジョナサン・ゴープルが、1871年(明治4)『摩太福音書』を刊行しています。

翻訳聖書の出版は、日本の印刷技術や近代日本語に大きな影響を与えたといわれますが、なかでも1873年(明治6)来日したネイザン・ブラウンは、聖書印刷のためにミッション・プレスを設け、そこでの印刷技術や活字、また平仮名や句読点の用い方は、大変影響の大きいものとなりました。ブラウンは、惜しくも志半ばで亡くなりましたが、夫人は横浜に英和女学校(のちに捜真女学校。現・捜真学院)を開校しました。捜真学院と日ノ本学園は、現在も親しい関係で、開校前の新聞紙上に「姫路捜真女学校が開校準備中」と報じられたのは、まだ名前が決まっていなかったために、同じ志の姉妹校の名を借用したからかもしれません。

日の本女学校はまた、開校から1937年(昭和12)までの半世紀近く、全員参加でSS(Sunday School)活動を続けました。これは、日曜日の午後、数名ずつに分かれて知人宅に赴き、集まった児童に向けて日曜学校を行なうという宣教活動です。1937年(昭和12)からは有志による活動となりましたが、市内の諸教会とともに〈日曜学校協会姫路部会)を組織。1950年代以降は、CS(Church School)、福音丸キャラバン、学童招待菖蒲沢キャンプといった活動に引き継がれ、伝統となっています。